

## The 14th Asian Chemical Congressに参加して

### アジアの化学会議ACC

2011年9月5日から同8日にかけて、バンコク（タイ）において開催されたThe 14th Asian Chemical Congress（以下14ACC; [www.14acc.org](http://www.14acc.org)）に参加した。本学会は、アジア化学会連合（Federation of Asian Chemical Societies, 以下FACS）の主催により、化学の広い分野を対象として、隔年で開催される。今回は、スワン・タンタヤノン、タイ化学会会長を実行委員長として開催された。

### 目立った日本からの貢献

14ACCには48カ国から約1,500人の出席者があったが、日本からの参加者は318人で、開催国タイの475人に次いで多かった。招待講演520件、一般講演292件、ポスター671件の発表があり、熱い討論が3日間繰り広げられた。タイは雨季で毎日のように午後にはスコールが降る。むせ返る熱気と辛い食事、冷たいビールに刺激を受けながら学会を楽しんだ。

FACSでは毎ACCにおいて、アジアで活躍する化学者が5つのカテゴリー別に表彰される。本年は化学教育賞に東北大学名誉教授の荻野和子先生が選出され、開会式で表彰が行われた。荻野先生のマイクロスケールケミストリーを利用した、安価で安全な化学実験装置の開発と若い世代への化学教育の啓発活動は国際的に高く評価されている。先生の受賞講演では、実演を交えて装置が紹介された。水の電気分解による水素の発生を、



写真1 荻野和子先生の受賞講演

数十秒で観察することができ、かつ実験設備の全くない講演会場でも実演できる。

会場ではロシアの参加者から、マイクロスケール装置を紹介するウェブサイト (<http://science.icu.ac.jp/MCE/>) や取扱説明書の英語版を早急に作ってほしいと、強い要請があった（本講演の内容は10月3日付C&ENにも紹介された）。

また、昨年ノーベル化学賞を受賞された鈴木章先生、根岸英一先生へFACS Fellowの称号が贈られることが決まった。

### アジア化学会連合 (FACS) とは

FACSは、1979年に発足したアジアの29の国と地域の化学会からなる連合で、東アジアからオセアニア、西アジアまで含む組織である ([www.facs-as.org](http://www.facs-as.org))。ACC開催国が会議後の2年間会長国を務める。通例ACCの直前に総会が開催される。今回は岩澤康裕日本化学会会長を含めて各国化学会の代表が一堂に集い、FACSの活動、ACCの運営などについて協議された。FACSはアメリカ化学会と協定を結び合同シンポジウムを開催するなど、アジア地域の化学会の代表として



写真2 閉会式。大会旗が手渡された。

活発な国際活動を展開している。ただ予算規模が小さい、恒久的な事務局がない、など今後考慮すべき課題もある。実務的な事項は役員会（Executive Committee, 以下EXCO）によって話し合われる。筆者はニュースレターの編集委員として2009年からEXCOに参加し、1期2年の役を務めさせていただいた。今学会を境に新たにアジアを3地域に分割し、それぞれの代表をEXCOメンバーとすることが決まった。東アジア・太平洋地域から日本が代表として選出され、日本化学会国際交流委員会委員長・高橋保先生（北海道大学触媒化学研究センター）が参加されることとなった。次のACCは2013年夏にシンガポールで開催される。2015年にはバングラデシュで開催されることが、今回の総会で決定した。

### アジアにおける日本の化学

急成長を遂げるアジアは、日本の化学工業にとって重要な生産拠点であり市場である。アジアの化学における日本チームの存在感をFACSの活動の中でも高めていくことが今後必要であろう。

〔鈴木教之（上智大学）〕

## UBE Group Thailand工場見学会報告



### 14ACC(第14回アジア化学会議)とは

「ACCって何?」。「これは、昨年知合いの大学関係者に「今度タイのバンコクで開催されるACCに参加しますか?」と質問した際の回答である」。

14ACCについては、本号で鈴木先生より詳細な説明がなされているので、ここでの説明は割愛するが、今回、多くの日本人研究者にACCの存在、FACSの活動内容が周知できたことは、FACSのSub-Project “Asian Network of Metallic Chemistry (ANMC)”のDirectorである筆者にとっても望外の喜びであった。

### いざ、ラヨンへ!

14ACCが終了した翌日の9月9日に、日本の大学関係者15名が参加したUBE Group Thailand工場見学会が幕を開けた。

この工場見学会は、今年が「世界化学年2011」であることを記念して、本会千葉泰久副会長(宇部興産相談役)、川島信之常務理事の尽力により企画されたものである。

UBE Group Thailandは、バンコクから南東約180kmの距離にある海岸の町ラヨンにある。手配していただいた大型バスに乗って3時間も行くと、長閑な田園風景の中に、近代的な建物が目に飛び込んできた。UBE Technical Center (Asia) (通称UTCA)である。ウェルカムボードにすべての参加者全員分の所属大学のエンブレムが印刷してあったことには大いに感動した。

まず、Technical Advisorの西田洋一氏



写真1 全体写真

からUBE Group Thailandの概要を説明いただき、昼食後、3台のマイクロバスに分乗し、2つの工場を見学した。最初は、UBE Chemicals (Asia) Public Company Limited (通称UCHA)内のカプロラクタム及びナイロン6製造プラントである。ここでは、1996年以来、年間11万トンのカプロラクタムと46万トンの硫酸アンモニウムを製造するとともに、年間7.5万トンのナイロン6を生産している。

次に訪問したのは、「年間7.2万トンを生産する」ポリブタジエンのプラントで、製品は主に大手タイヤメーカーに出荷されている。タイに進出した1996年から年々着実に生産規模を拡大しており、UBE Groupのバイタリティーとバイオニア精神には、心より敬意を表する。

その後、再びUTCAに戻り、隣接するi-PlazaにてUBEGroupの会社概要や展示物の見学を行った。最先端技術や製品が惜しみなく展示され、同社の懐の深さが十二分に伝わった。その後、UBE Groupの技術及びR&Dの紹介を受け、多くの諸問題について、2時間にわたって活発な議論が参加者の間でなされた。夕刻には懇親会が開催され、UBE Group ThailandのCharunya社長(宇部興産常



写真2 宇部興産社史を説明するAthapol氏(京都大学PhD.取得)

務執行役員)による歓迎の挨拶と素晴らしいタイ料理に舌鼓を打ち、1日目を終わった。

2日目は、バスでマプタプット工業団地に移動し、そこで責任者であるPeravatana氏から工業団地内のインフラや監視・管理システムに関する説明を受けた後、施設内を見学した。

### おわりに

今回、タイの化学工場を見学するという通常できない体験をさせていただいた。我々の訪問を心から歓迎していただき、細かな心遣いで準備いただいたUBE Group Thailandの関係者にこの場を借りて感謝申し上げたい。日本企業が海外に進出する際の苦労話や現地の人々と共存していくことの重要性など多くのことを学ぶことができた。

滞在中に出会ったタイの人々の笑顔とコーヒーブレイクで食したこれまでで一番美味しいと感じたドリアンの味が忘れられない。

(Director of ANMC 西原康師  
(岡山大学大学院自然科学研究科))

©2011 The Chemical Society of Japan